



KAGAWA HISTORICAL ARCHITECTURE COMMITTEE

vol.05



歴史的建造物を読む

善通寺南大門

善通寺宝物館 松原 潔

善通寺南大門

建築年代: 明治41年(1908)/平成7年(1995)改修
間口: 5.64m
構造: 木造、瓦葺、袖塀付き
所在地: 香川県善通寺市善通寺町3-3-1-622-1

善通寺は丸亀平野の南西に位置し、弘法大師空海(774~835)の誕生地に建つ寺院で、四国八十八ヶ所霊場第七十五番札所でもあります。その正門(総門)にあたるのが南大門(国登録有形文化財)で、現在の建物は明治41年(1908)に造られたものです。威容を誇る一方で、細部に目をやると、不思議なかたちをしています。歴史を紐解きながらその謎に迫ります。



その見どころと不思議な構造

南大門は、正面と後方に唐破風が付き、左右の妻も唐破風とする本瓦葺で、背後に控え柱とその屋根(切妻造・本瓦葺)を架けた高麗門と呼ばれる形式で造られています。高さは9.7m(間口の高さ

7.4m)あり、扉はなく、正面上方には善通寺の山号である「五岳山」の扁額が掲げられています。意匠の細部に目をやると、てっぺんの棟積の水板部分には、龍・迦陵頻伽・鳳凰が立体的にあらわれ、四隅の軒先には四天王像(南東: 持国天、南西: 増長天、北西: 広目天、北東: 多聞天)が鎮座します。堂々とした風格のある門ですが、背後に回って見上げると不思議な構造が目に残ります。建築好きしか気づかないかもしれませんが、控え柱の屋根は唐破風付きの主屋根にほぼすべてが覆われており、その屋根は機能していません。「クセがすごい」過剰な装飾とも解釈できますが、何とも不思議です。



南大門部分

南大門の歴史と近年の修復

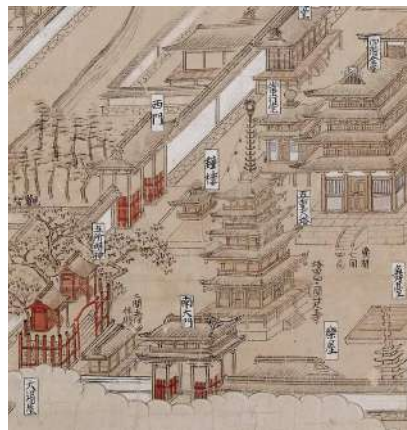
善通寺の創建は大同2年(807)とされますが、その時の南大門はどのような姿

だったのでしょうか。徳治2年(1307)の年記のある「善通寺伽藍并寺領絵図」(国重要文化財)をみると(上方が南、南大門の位置は画面左上)、誕生院(西院: 画面右)の正門である仁王門が描かれているのに対して、南大門は門の位置を示すのみで、この頃にはすでに失われていたことがわかります。



善通寺伽藍并寺領絵図(徳治2年(1307))(上が南)

その後も再建された痕跡はなく、弘化4年(1847)の「金毘羅参詣名所図会」の中でも門柱のみの描写となっています。一方で、往時の境内の姿を示したと思われる寛文6年(1666)の年記を持つ「善通寺伽藍図」や江戸時代後期に描かれたと思われる「善通寺伽藍・誕生院図」には、二階建ての楼門として描かれています。



善通寺伽藍・誕生院図(江戸時代後期)

一般的に高麗門は城門に採用されることが多いことを勘案しても、おそらくは、創建当初の南大門は楼門だったのではないかと推測されます。創建期には境内の南側に南海道(古代

の官道)が通じていましたが、近世に遍路道や金毘羅参詣路が整備されると、その利便性から境内東側が発展し東門(通称: 赤門)がいわば正門となります。現在の建物は、明治41年に日露戦争の戦勝を記念して再建されたもので、平成7年(1995)に屋根を中心に大規模な修復・改修が行なわれています。再建当初の姿を知る上で川瀬巴水(1883~1957)が描いた風景版画が参考になります。謎を解くカギはこの絵にありました。



川瀬巴水「讃州 善通寺」(昭和12年(1937))

巴水是全国を旅してその名所旧跡を描き、近年スティーブ・ジョブズが収集していたことで再評価されている作家です。この「讃州 善通寺」も昭和9年(1934)の旅行で写生され、昭和12年に出版されたものです(『日本風景集Ⅱ関西篇』)。両脇に塀はなく、神社の鳥居のようなたたずまいです。主屋根に飛檐垂木はなく輪垂木のみで、大棟もきわめて簡素な造りとなっています。善通寺は明治35年(1902)に五重塔が完成し、昭和6年には真言宗善通寺派の大本山になり、明治末から昭和初期はその権威を高めようとする時期に

あたります。巴水が讃岐を代表する名所として取り上げたにもかかわらず、再建された南大門は象徴としての総門の役割を果たせていなかったようです。この時期に善通寺が発行した記念誌『屏風浦霊光』[大正11年(1922)発行]には、東門(赤門)・仁王門が写真付きで紹介されているにもかかわらず南大門は載せられていません。こうした不遇ともいえる来歴を刷新したのが平成の改修でした。

善通寺扁額の伝説

弘法大師空海の生涯とその奇跡・霊瑞をあらわした『弘法大師行状図画』巻第6「善通寺額事」[江戸時代書写・原本は木食応其(1536~1608)が文禄5年(1596)に開板した10巻本]には善通寺の門に掲げられていたとされる弘法大師自筆の額に関する話が載せられています。



弘法大師行状図画 巻第6「善通寺額事」

「その昔、善通寺には弘法大師筆の扁額が掲げられた門があった。陰陽師・安倍晴明(921~1005)は縁あって讃岐国を訪れる機会があり、この門の前にさしかかると配下の鬼神がもつ松明の火が消え、門を通り過ぎると再び火がともったという。これを見て晴明は、この門には四天王がおり、寺を火災から守護しているのを感じ取ったという。」現在の南大門に掲げられた四天王はこの霊瑞に基づいて平成7年の改修で



持国天



増長天



広目天



多聞天

増補されたものです(施工: 伸和建設)。正門としての荘厳さを高めるために物語(伝説)を付与し、また、構造も二軒にして装飾性を高めた結果、主屋根が前後に拡大したのでしょう。当初の屋根の大きさは飛檐垂木を支える軒を除いた平面だったと思われます。不思議な構造はこうして生まれたのだと考えられるのです。歴史的建造物も時にアップデートされ、新たな価値を纏って成長してゆくといえるでしょう。同時に、こうした履歴を正しく記録して後世に伝えてゆくことも必要だと感じています。



修復銘板(平成7年(1995))

参考文献

『善通寺史』総本山善通寺 2007年
松原潔「善通寺諸堂めぐり13 南大門」「へんじょう」第41号 2017年7月
『川瀬巴水 旅と郷愁の風景』(展覧会図録)2023年

●コラム
古民家を
思う

第5回

異彩を放ち続ける看板建築

高橋 史

古民家を懐かしいと思う。
住んだこともないのになぜか懐かしい。
懐かしさのより所(根拠)はどこに
あるのだろうか。



これは看板建築?西洋建築?

丸亀駅の北側の旧市街にある堀家時計店(ほりけとけいてん)は、コリント式の柱やフェストゥーン(花綱)といわれる繊細なレリーフが目を引く看板建築です。看板建築と聞いてはいたものの、いざ目の前にすると「あれ、これは洋風建築では?」と不思議に思いました。看板建築とは、建築史家・藤森照信さんが昭和50年(1975)に建築学会の場で発表した建築様式の一つ。大正12年(1923)の関東大震災後に、防火対策として木造長屋の正面に不燃材料の銅板、モルタル、タイル造などのファサードをくっつけた商店建築で、東京を中心に各都市に広がりしました。定義としては、①ファサードが平坦、②軒を出さない、③木造であることが挙げられています。一方、ファサードは建て主や大工の好みによって自由にデザインされたので、よく言えば工夫を

凝らした、悪く言えば勝手気ままなデザインが生まれました。藤森さんによると、洋風建築やアール・デコのデザイン要素を自由に持ってきているから、断片的でデタラメなシロモノが多かったとのこと。そこに江戸趣味の紋様が返り咲きたりするから、素人の私からすると和でも洋でもない摩訶不思議な建築に見えてしまいます。私にとっての看板建築は、江戸東京たてもの園



江戸東京たてもの園
看板建築
中:武居三省堂(1927)
右:花市生花店(1927)

の武居三省堂や花市生花店が「正統派」で、それに対して堀家時計店は、明治期に西洋建築を学んだ建築士が手がけたような、洋風建築のデザインを踏襲した建物という印象を受けました。なぜそう感じたかという、赤坂離宮(明治42年・1909)や日本橋の三井本館(昭和4年・1929)など、私の中の「正統派」洋風建築に堀家時計店のデザインがぴたりと当てはまったからです。そこには堀家時計店が建てられた背景も関係しています。

大阪の建築士が建てた、もと病院建築

この建物はもともと本村病院という病院建築として昭和8年(1933)に建てられました。設計したのは米澤哲吉さん(1901-1959)という方。大阪府立西野田職工学校(現:西野田工科高等学校)の建築設計製図科を卒業し、32歳の時にこの建物を設計しました。京都や大阪から職人を集めて、半年ほど住み込んで建てたそうです。ちょうど取材前に建設中の写真が堀家さんに届いたことで、当時の様子を知ることができました。本村病院の揃いのはつを羽織った職人たちが並ぶ写真からは、この建物への力の入りようが見てとれます。また、建設中の写真とともに、米澤さんが参考したと思われる地方銀行のような洋風建築の写真もありました。米澤



さんは大阪などの都市で洋風建築の実物を見て、そのデザインを本村病院に取り入れたのではないのでしょうか。だから丸亀市という地方都市において、東京に引けを取らない、洋風建築と見紛うほどの看板建築が生まれたのではないかと私は考えました。本村病院はその後、旅館を経て、昭和39年(1964)に堀家さんの両親が購入し堀家時計店となります。堀家さん12歳のときでした。あらためて、ファサードをじっくり見てみましょう。トップには実をつけた月桂樹のレリーフ、その両脇にはバラを模したような模様。入口には植物のアカンサス(ハアザミ)をモチーフにしたコリント式の柱があります。この



町の人たちに対する平和や友愛を表現しているよう。これらは左官職人がコテを使ってモルタルで細工したもの。現在まで欠けることなく美しい状態を保っており、当時の左官技術の高さが伺えます。看板建築ですから中の造りは木造です。2階は中廊下型で和室が6部屋あるそうで、当初は入院患者用の病室だったのではないかと推測できます。玄関を入ったところは店の間になっていて、病院の受付だったカウンターをそのまま店のカウンターとして使用しています。今もときどき建物を見上げては「きれいだな」と思うと堀家さん。建設当時、異彩を放っていたであろうこの建物が、これからもこの通りのシンボリックな存在であり続けてほしいと、そっと心の中で願いました。

堀家時計店

建築年代:昭和8年(1933) 建築面積:125㎡
所在地:香川県丸亀市西平山町98
構造:木造2階建 公開:外観のみ見学可

参考文献

『看板建築』藤森照信 株式会社三省堂1994年1月20日発行
看板建築考 様式を超えて 横手義洋 西洋建築史、近代建築史。東京大学大学院工学系研究科助教(2010) <https://db.10plus1.jp/backnumber/article/articleid/651/>
看板建築が未来に繋げる街の魅力(宮下潤也:一級建築士、建築イラストレーター) https://www.cemedine.co.jp/cemedine_reports/es4jma00000056mv.html
明治以降の擬洋風建築から見た日本と諸外国の異文化交渉史 伊藤 遥 https://lab.kuas.ac.jp/~jinbungakkai/pdf/2018/h2018_10.pdf
和歌山県下の明治初期から大正時代における医院建築の洋風化の足跡 千森 督子 日本インテリア学会論文報告集18号, 2008年3月 https://www.jstage.jst.go.jp/article/jasis/18/0/18_11/_pdf-char/ja

邦坊作品からみる

讃岐の風景・建物探訪

灸まん美術館 / 和田邦坊画業館 学芸員 西谷美紀

今回は和田邦坊がデザインした絵葉書を手掛かりにして建物探訪に出かけましょう。まず、灸まん美術館が所蔵する絵葉書コレクションは約400点あります。手のひらサイズの絵葉書は、場所をとらずに調査しやすい、見て楽しい、という理由で着任早々から整理しはじめた資料です。和田邦坊旧蔵資料(遺品)だけでなく倉庫にあった在庫品、寄贈や購入資料など様々な出自をもつ絵葉書たち。年賀状、季節の挨拶状(暑中見舞い・残暑見舞い・寒中見舞い)、観光絵葉書など、新品・未使用品だけでなく邦坊宅に送付された葉書も含まれており貴重な書簡資料としても注目しています。

戦前、新聞漫画家・小説家として東京で大活躍していた邦坊ですが、昭和13年に体調不良により帰郷。それ以後、乗物嫌いに拍車がかかり一度も県外に出ることがなかったといえます。遺された作品の画題をみると、観光名所も数多く描いていますが所在が分からない風景画も少なくありません。しかし、邦坊の行動範囲を考えると、どの風景も香川であることは間違いありません。故郷を描き続けた画家。小さな絵葉書の世界から邦坊が見た故郷の風景をご紹介します。今回は、機関誌のテーマにあわせて「門」に注目しました。



大門あまぎけ茶屋

絵葉書 / 木版画 / 昭和20年代
灸まん美術館所蔵(PC138)

建造物概要
名称：大門
所在地：琴平町
形式：入母屋造本瓦葺
建築年代：慶安2年(1649)

長い石段の途中にある金刀比羅宮の大門。国民服を着た参拝者や菊の御紋が入った提灯が描かれており戦勝祈願で賑わう戦前の様子だと分かります。大門は、かつては寺院の山門であったため仁王門と呼ばれていました。絵葉書をみると、すでに仁王像の姿は見えません。金剛柵もなくなり参拝者たちの休憩所として開放されています。昭和46年、随神像が設置されて門内の景色も少し変化がありました。しかし、大門の前にある甘酒屋と門をくぐった先にある五人百姓の飴屋の出店は今も昔も変わりません。

讃岐旧家の長屋門

絵葉書 / 木版画 / 昭和32年
灸まん美術館所蔵(PC13)

建造物概要
名称：長屋門
所在地：不明
形式：寄棟造本瓦葺
建築年代：不明



県内にあった旧家の長屋門を描いています。屋根にはずっしりと雪が積もっており大きな門松や日の丸の旗を掲げていることから正月の風景だと分かります。腰壁のなまこ壁をみると屋根は瓦葺になるでしょう。正面の壁は、雪の白さ対比するため少し色を加えた可能性はありますが黒喰塗のようです。中央にある両開きの門扉は、母屋に繋がる出入り口で開門のままになっています。また庇がついたような窓もみえます。この長屋門の所在地は分かっていませんが、重厚な外観だけでなく丁寧な正月の設えをみると旧家としての格式の高さを想像することができます。

丸亀城大手門

絵葉書 / 木版画 / 昭和34年
灸まん美術館所蔵(PC14)

建造物概要
名称：櫓門
所在地：丸亀市
形式：入母屋造本瓦葺
建築年代：寛文10年(1670)



丸亀城を守る大手一の門、櫓を構えた城門です。櫓の土台は、石材を隙間なく積んだ強固な石垣が支えています。外壁は屋根の影になり黒くなっていますが本来は雪のような白い漆喰を塗っています。長方形の窓が横一列に並び、城門の格式を示す長押形の意匠も薄っすら描いています。城門の下をみると傘を差す和服姿の女性が歩いています。モノクロームに描いた雪風景のなかで紅一点の人物。城門の力強さとたくましさを引き立たせる存在です。

参考文献

『民家巡礼—西日本編—』相模書房、昭和54年
『高松市の文化財』高松市歴史民俗協会、平成元年
『重要文化財金刀比羅宮大門修理工事報告書』金刀比羅宮、昭和63年
『重要文化財丸亀城大手一の門・大手二の門・附東西土塀修理工事報告書』丸亀市、昭和38年
三浦正幸『近世城郭の作事 櫓・城門』原書房、令和4年



和田邦坊旧蔵資料(K206)
旧宅に遺されていた写真資料は700枚以上。スナップ写真だけでなく画題の参考として撮影した風景写真も数多く含まれている。写真にある建造物は壁面が板張りになっているため絵葉書とは違う長屋門になるが絵になる門構えである。和田邦坊旧蔵資料をみると作品だけでなく写真資料からもいまはなき香川の農村部の様子を伺い知ることができる。



和田邦坊旧蔵資料(K569)
建具金物を接写した資料。讃岐民芸館の館長をしていた邦坊。様々な資料を蒐集し意匠研究にも熱心だったことが分かる。



ワダクニボウ
和田邦坊 (1899—1992)

香川県琴平町出身。時事漫画家、小説家、商業プロデューサー、讃岐民芸館館長、デザイナー、画家として活躍した人物。代表作は、お札を燃やしている船成金の風刺漫画、小説『うちの女房にや髭がある』など。戦後は、香川県民であれば誰もが知る物産品の数々をデザインし「香川のデザインは邦坊のデザイン」と謳われる時代を作り上げた。



灸まん美術館 / 和田邦坊画業館
住 所 765-0052 香川県善通寺市大麻町 338
電 話 0877-75-3000
休館日 火曜日・水曜日・年末年始
※和田邦坊画業館の展示替え期間中は閉室

丸亀のお城に
まだお殿様が
いたところ
その門は建て
られた
それは最後の
お姫様のた
め
の
門
だ
っ
た
と
い
う

薬医門とは扉が付く本柱が門の中心線からずれている。本柱と控柱を結ぶ梁の中央に束をのせてその上に切妻屋根がのる門で、扉2枚は羽目板縦張框戸が中央で左右に開く。屋根は切妻造りの本瓦葺きで、北側の鬼瓦は宝珠、南側は打ち出の小槌、拝み紋は左三巴である。南北鬼瓦どちらにも〇に三の刻印があり、これは丸亀市瓦町にあった瓦屋みきやが作ったものだと判明している。軒巴瓦は右三つ巴と左三つ巴、蛇の目の三種類が混在し珠文が9～13個と複数種ある。平唐草瓦は半裁花菱や蕨葉文様などが混在し、降鬼は宝珠や梅鉢。熨斗瓦は2



津森天神社「神門」 建物調査

村井花子(四国職業能力開発大学校)
小山修平(四国旅客鉄道株式会社)

調査を行った神門は、香川県丸亀市津森町の津森天神社の境内にある。現在は津森天神社と呼ばれているが、先に地主神である少彦名神社があった。慶長7年(1602)に200m北東から現在の位置に天神社は移され、その他境内には5社余りの神社が大正初期に移されている。敷地は南北に走る道路に面しており、天神社と少彦名神社はともに北東へ向いている。天神社の正面には数年前まで隨身門がありその先の道路に鳥居を置いている。そして鳥居の先1kmの位置にちょうど丸亀城天守がみえる。神門は隨身門跡の礎石を入れて南側にあり、少彦名神社の本殿、幣殿、拝殿の正面に位置する。少彦名神社は昌泰2年(899)の鎮座とされており、京極家の代々の崇敬厚く本殿拝殿等は文政2年(1819)に建築。神門は慶応3年(1867)の再建にして皆京極家の寄付に成しものなりと、仲多度郡史(大正7年・1918)に記載がある。神門は木造一間一戸袖壁付きの薬医門形式である。

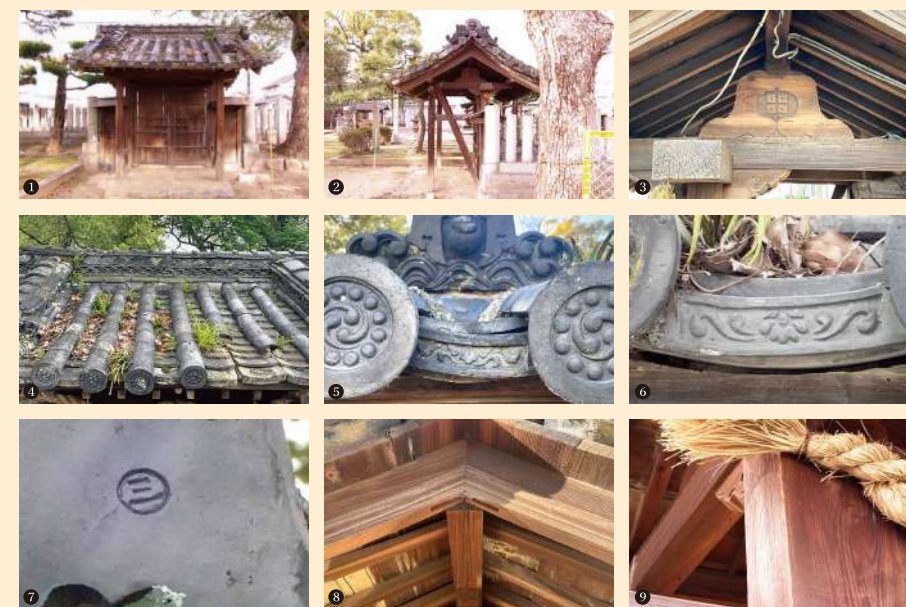
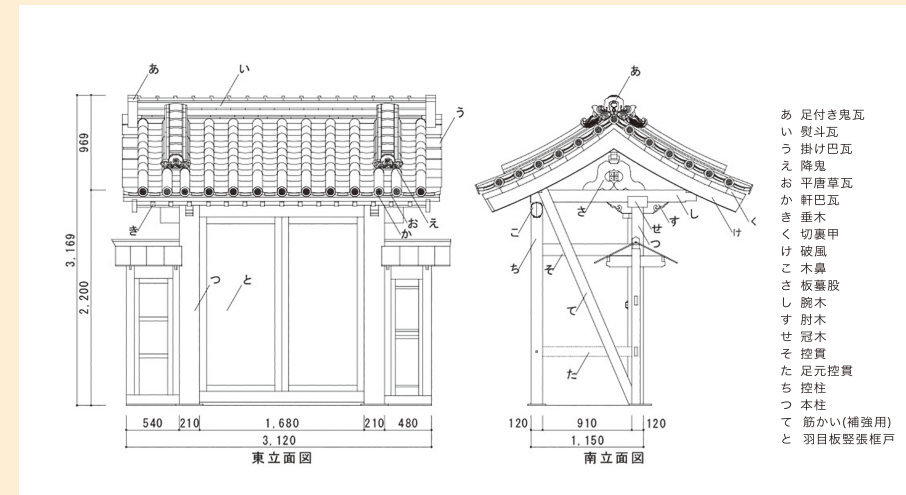
重になっており、上から松葉、輪違いとなっている。彫刻としては、板葺きに京極家の家紋である四ツ目結紋が裏表にある。小屋束の頂部には猪の目紋が四方に施されている。木鼻、肘木、桁に曲線的な意匠が見られ、軽やかな雰囲気を醸し出している。懸魚は南北両側とも消失している。ちなみに境内にある他の懸魚をみると、天神社の拝殿は蕪、本殿は鶴、奉獻漱盤は亀甲、少彦名神社の本殿は蕪となっている。また、親柱の側面には木瘦せで段ができおり、袖壁と親柱の間に絵振板(柄振板)があったとみられる。材は榿を使用していると思われ、どの材も節が多い。補強のため、後に筋かいが本柱と控柱の間に取り付けられている。南側の足元控貫が欠損している。どの材も風食等による損傷が激しく、建物が全体的に北へ傾きかけている。また、屋根瓦の痛みも激しく危険な状態であると言える。神門が建てられた慶応3年(1867)は翌年が明治維新という時代

で、丸亀藩最後の藩主は京極朗徹であった。その頃の丸亀藩は先代京極高朗の世から続く財政難だった。先代高朗は文化8年(1811)17歳の時から40年の長きに渡り丸亀藩主として政務に精励するとともに、詩人としても詩集を残した人物である。その高朗には六男九女の子があったが、成人した男子はわずか一人でその後継ぎもあえなく28歳の若さで弘化2年(1845)に亡くなってしまった。その他の女子も嫁に行き残るは末娘の十だけとなり、このままでは名門丸亀京極家が絶家になるため高朗の従弟の子、栄三郎を十の嫡養子にと考えたようで

ある。江戸時代には大名家が養子をとるためには将軍の許可が必要であった。しかし、大名が直接将軍に申し出ることは叶わず、取り次いでもらうためには幕府の重臣たちを招いて宴を催し、帰りには手土産として莫大な金子を持たせるなどの賄賂が必須の世であった。それらの涙ぐましい記録が詳細に残されている。その後、嘉永3年(1850)に高朗が隠居し朗徹に藩主が変わり、家来の減給などの策もとられたようだが、財政難は幕末まで続いたようである。そのような折建てられたこの神門は非常に小ぶりで、臺股に京極家の家紋が彫られているが

節が目立つなど、全体に質素なつくりと言える。仲多度郡史には、京極家の寄付によるとあるがその一文以外の根拠が乏しい。しかし、今回の調査で近隣の住民からは「お姫様の門である。」「御成門と呼んでいた。」などの話を耳にした。やはり、高朗の実の娘である最後のお姫様が少彦名神社を参拝し、健やかに長生きしてほしいと願う父と夫朗徹の思いから、この神門は確かに京極家により建立されたのではないだろうか。

津森天神社では天神社敷地内に数棟ある建物修理のほか排水施設整備や問題ある樹木の伐採など整備工事を進めている。神門は丸亀市内に残る京極家に縁のある唯一の建造物であるため、修理による保存の可能性を探ってきたが、予算の目処が立たない限り保存は断念せざるを得ないと判断した。天神社の氏子で構成する津森天神社整備事業建設委員会は、神門の記録を残すための調査を四国職業能力開発大学校住居環境科に依頼した。調査にはNPO法人香川歴史的建造物保存活用会議の会員や文化財の専門家が協力した。解体に際しては改めて詳しい調査を行う予定であるが、保存の可能性も検討している。(津森天神社整備事業建設委員会 大西泰弘)



① 神門西面 ② 南面 ③ 板葺き(四ツ目結紋) ④ 熨斗瓦(上から松葉、輪違い) ⑤ 平唐草瓦(半裁花菱文様) ⑥ 平唐草瓦(蕨葉文様) ⑦ 北側鬼瓦 刻印(〇に三) ⑧ 懸魚の痕跡 ⑨ 南側本柱(絵振板の痕跡)

参考文献
『仲多度郡史』仲多度郡 編纂 1918年
『図解・歴史散歩事典』井上光貞 監修 株式会社 1981年
『古建築の細部意匠』近藤豊大 著 大河出版 1989年
『丸亀史抄 真木信夫先生追悼号』丸亀市文化財保護委員会編集 丸亀市教育委員会 1975年
『丸亀の今と昔(上)』城神小学校社会科学部 監修 堀田瑞左右・福家悠衛 1954年
『伝統木造建築の屋根技術～瓦から分かること～』渡邊 誠 著 2023年度 香川文化遺産保存活用技術者養成講座プログラム資料

津森天神社「神門」

建築年代: 慶応3年(1867)頃
建築面積: 約1.95㎡(桁行1.89m、
梁間1.03m)
所在地: 香川県丸亀市津森町629
構造: 木造平屋
公開日: 随時

香川歴史的 建造物保存活用会議 通信 vol.05

発 行：特定非営利活動法人
香川歴史的建造物保存活用会議
発行日：2024年10月15日
住 所：〒763-0033 丸亀市中府町四丁目2-27
電 話：0877-85-5126 FAX：0877-85-5127
U R L：https://kagawa-historical-archi.org
m a i l：info@ksgawa-historical-archi.org
編集会議メンバー（50音順）
大西泰弘、高橋史、玉井幸絵、西谷美紀、松原潔、
村井花子、森本英樹

歴史的建造物を読む 善通寺南大門 —— 1-2

松原 潔 まつばら きよし

日本の仏像、特に運慶の作品にひかれ美術史を学ぶ。仏像だけでなく、その安置空間や建築にも関心がある。平等院鳳凰堂、浄土寺浄土堂、東欧・北欧の木造教会も好き。

異彩を放ち続ける看板建築 —— 3-4

高橋 史 たかはし ふみ

大学で地域づくりを専攻し、香川県内の観光まちづくりに10年ほど携わる。明治～昭和初期の近代建築めぐりが趣味。現在、ウェブ制作会社で取材・ライティングを担当している。

「邦坊作品からみる」 讃岐の風景・建物探訪 —— 5-6

西谷美紀 にしたに みき

龍谷大学卒業後、学芸員として文化財業務に携わる。得意分野は民具整理・資料調査。炎まん美術館では郷土史の視点で和田邦坊研究に取り組んでいる。

津森天神社「神門」 —— 7-8

小山 修平 こやま しゅうへい

2024年四国職業能力開発大学校住居環境科を卒業。四国旅客鉄道株式会社に就職。卒業研究で『津森天神社「神門」建物調査』に取り組む。

村井 花子 むらい はなこ

2019年から四国職業能力開発大学校勤務。歴史的建造物に関心をもち、現在は学生と学校を飛び出し建物調査、イベント等の企画を通してまちなみ保存に奮闘している。

「門」 村井 花子 むらい はなこ —— 11

活動 報告

産業遺産連続講座

昨年度まで開催していた
ヘリテージマネージャー養成講座は
一旦お休みして、今年度は地域に根付いていた
産業の姿を伝える「産業遺産」をテーマにした
連続講座を開催します。

2024年度 産業遺産連続講座 プログラム

月／日	講義テーマ
6／21	産業遺産とは何かを知る 講 師／上田恭嗣 ノートルダム清心女子大学名誉教授
7／13	産業遺産の保存活用について知る 講 師／前畑洋平 NPO法人 J-heritage
10／12	鉄道遺産を知る（現地見学） 講 師／多度津町職員
12／21	産業遺産と地域づくり 講 師／岡崎直司 えひめ地域活力創造センター・近代化 遺産活用アドバイザー

祓川土塀再生 プロジェクト

この活動は、当会会員が管理する解体寸前だったまんのう町の土塀〔大正3年（1914）の築造か〕を修復するプロジェクトです。土塀は景観を形づくる重要な要素のひとつであり、形状・構造・来歴を丹念に見てみると、その土地のくらしや歴史が詰まった文化遺産であることがわかります。修復を通じて得られた知見を基に、失われつつある土塀の再生を目指したいと考えています。また、その成果が地域の景観の復元あるいは修景へとつながることも期待しています。

祓川（はらいがわ）は丸亀平野を流れる土器川の別称で、高松からの金毘羅参詣路が交差する付近から上流をいい、象頭山を背景とするその田園風景は近世の浮世絵にも描かれ、讃岐を代表する名所ともいえます。土塀のある屋敷は土器川からの伏流水が「出水」として湧き出る場所に位置し、その家は水守の役目を担っていました。プロジェクトの本格的な作業は2020年3月にスタートし、2024年7月までに計14回実施されました。当会会員9名を中心とする有志で、左官の指導の下に建築士や学芸員、会員のお子さんなど様々な素人が悪戦苦闘しながら取り組んでいます。ワークショップとして広く参加を呼びかけて実施した回もあります。高さ約2m、全長25mほどを2期に分けて修復中で、第1期が完成に近づきつつあります。参加は随時受け付けています。



門

村井花子

門はあらゆる地域、時代を問わず造られてきた。呼び名も多種多様で門の建築様式で分類する名称はもちろんのこと、建築された位置や方角から名付けられたり時には使用者、安置されるものから呼び名が決まったり。そこで、いくつかの門の様式を紹介する。

①高麗門(南大門):本柱の上に切妻屋根があり、本柱と控柱の間にも屋根を有する。②薬医門(北門):本柱が切妻屋根の中心からずれ、控柱も一つの屋根の下におさまっている。城門から寺社、民家に至るまで建築される。③楼門(中門):2階建ての門で、1層と2層部分の中間部分に屋根はなく、高欄がまわる。社寺に多くみられ、中に梵鐘を吊ることもある。④八脚門(仁王門):本柱が4本あり、その前後に控柱が4本ずつ計8本あるもの。

中央が出入口になり左右に金剛力士像が安置されると仁王門、隨身像が安置されると隨身門と呼ばれる。⑤向唐門(勅使門):切妻屋根の軒先に、丸く反上がった山形をなす唐破風を有する門。⑥竜宮門(正覚門、西門):2階建ての門で1階部分は漆喰塗でアーチ型通路を持つ。中に梵鐘を吊ることもある。ここで紹介したものは、全て「総本山善通寺」の門である。名称は建築様式の分類と括弧の中は通称名を記した。そうなるとあの一番有名な門「赤門」はなぜ取り上げないのか。実は、建築様式の観点からすると赤門は謎めいている。一見すると高麗門に見えるが少し違う。さあ、謎を解いてほしい、いつでも門は開かれている。

※本柱:門の扉がつく通りの柱。控柱:本柱の通り以外に補強で建てられる柱。



①高麗門(南大門)



②薬医門(北門)



③楼門(中門)



④八脚門(仁王門)



⑤向唐門(勅使門)



⑥竜宮門(正覚門、西門)



KAGAWA HISTORICAL ARCHITECTURE COMMITTEE

特定非営利活動法人

香川歴史的建造物保存活用会議

ご相談・お問い合わせは

〒763-0033 丸亀市中府町四丁目2-27

TEL: 0877-85-5126

FAX: 0877-85-5127

mail: info@kagawa-historical-archi.org

URL: <https://kagawa-historical-archi.org>

香川歴史的建造物保存活用会議ホームページQRコード

